

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學図書館所蔵「舟のみとく」の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002355">https://doi.org/10.57529/00002355</a>

# 國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』の解題と翻刻

針本 正行  
山本 岳史

## はじめに

國學院大學図書館に絵巻物の体裁を持つ『舟のゐとく』（國學院本）が収蔵された。すでに、『舟のゐとく』は、詞書と絵を持つ天理大學図書館所蔵本（天理本<sup>1</sup>）、石川透氏により確認された詞書のない絵だけのポストン美術館所蔵『舟の始り物語』（ポストン本<sup>2</sup>）、大谷大氏により報告された絵がない本文だけの『舟の威徳』（石川本<sup>3</sup>）が知られている。國學院本『舟のゐとく』は詞書と絵を持つものとしては天理本につづくものである。そこで、本稿では、國學院本『舟のゐとく』の特征を明らかにしたい。のゐとく』を翻刻し、挿絵の構図を示すことを通して、國學院本『舟のゐとく』の特征を明らかにしたい。

## 【書誌】

二卷。料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様。紙高は三三二・二糎。上巻の長さは凡そ一〇・三米、六図、下巻の長さは凡そ八・三米、五図。

## 一、國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』の本文

國學院本と天理本の大きな相違は、國學院本の下巻冒頭に神功皇后譚があるのに対して、天理本には神功皇后譚がなく、かわりに「築紫の相伴の狭手彦譚」・「浦嶋太郎譚」・「聖徳太子譚」などがあることである。なお、天理本の上巻の末尾に神功皇后譚の本文はないものの、國學院本の神功皇后譚に相当する絵があることを岡嶋偉久子氏からご教示いただいた。ボストン本にも神宮皇后譚の絵があるので、原初形態の『舟のゐとく』には、下巻冒頭に神功皇后譚があり、その後「築紫の相伴の狭手彦譚」・「浦嶋太郎譚」・「聖徳太子譚」が展開していたと思量される。

また、國學院本の神功皇后譚と石川本のそれとを比較するに用字法以外の本文異同はほとんどない。しかし、巻末の舟の賞揚譚においては、石川本が「心つくしにまつら舟、なにはによする（あしわけ舟）」・「なにはあらぬいなふね、さほさしのほる高瀬舟」などと、歌言葉遊び的に、「心づくし」の「待ら舟」、「なにはにはあらぬ否」の「稲舟」という文章が挿入されている。さらに、國學院本の巻末「まことにめてたきるとくなり」及び石川本の巻末も「まことに目出たきいとくなるへし」とあるところ、天理本には当該本文はない。國學院本、石川本は、天理本に比して祝儀性があるということが出来る。

なお、國學院本『舟のゐとく』の本文には二箇所脱文がある。一箇所は、上巻第四図の相当箇所に、天理本の「をなし、四時のつとめ」から「皇帝、これをきこしめして、それ民のくるしみは、一人の政事、天にそむきける、ゆへなるへし、しからは朕」（『室町時代物語大成』11 五五七～五五八頁）であり、二箇所目は、下巻第十図の相当箇所に、天理本の「朕か命は」から「かまたりと、申せし人は、后伯女といへるひめきみを、もたせ給ふ、きさき」（『室町時代物語大成』五六五頁）までである。この脱文は原初の絵巻からではなく、後世になって、補修する過程で生じたもの

であろう。本文に替えて位置づけされた絵も、結果として錯誤して挿入されている。

翻刻にあたっては、上巻を山本岳史が、下巻を針本正行が担当した。

## 一、「舟のゐとく」の挿絵の構図概要

國學院本の『舟のゐとく』の絵は上巻に六図、下巻に五図ある。上巻の第四図、下巻の第十図は当該の内容に相当する詞書を持っていない。ボストン本については、石川透氏から情報の提供を受けた。

第一図は蚩尤が皇帝の謀殺を企てる場面である。本図は二紙分の長大図で、一紙目に蚩尤邸の門から庭にかけて軍勢が描かれ、二紙目に邸内で蚩尤と家臣とが謀議している様子が描かれている。ボストン本に本図に相当する絵は確認できない。第二図は貨狄と揚基が皇帝に拝謁する場面である。貨狄と揚基がこれから皇帝の御前に向い、拝謁しようとしている。ボストン本の第一図に相当する。第三図は蚩尤軍が貨狄・揚基軍と合戦する場面である。右手に蚩尤軍、左手に貨狄・揚基軍が描かれている。本図は二紙分の長大図で、ボストン本第二図に相当する。第四図は、竜宮城での宴席の場面と推測される場面である。國學院本には本図に対応する本文は確認できない。ボストン本の第七図に宮中で女性と男性が宴席を共にしている場面があり、その図は天理本や石川透氏蔵本の下巻に収められる浦島太郎譚の絵と推測されている。本図は、ボストン本の第七図と構図が近い。國學院本に浦島太郎譚の本文はなく、当該箇所は絵の前後に約二紙分の本文の脱落があり、本図が浦島太郎譚の絵と構図が近いことから、それを補う形でここに配置されたと思われる。第五図は皇帝が泉水に浮かぶ柳の葉をみて舟を考案する場面である。ボストン本に本図に相当する絵は確認できない。第六図は宮中での神楽の場面と推測される場面である。國學院本には本図に対応する本文はなく、天理本や石川透氏蔵本にも見出せない。ボストン本の第十一図に宮中で神楽が演じられている場面を描いた

絵があり、本図と構図が近い。本図の直前の詞書は散らし書きになっていないので、別の場所に置かれていた絵であったと思われる。天理本上巻末尾には、神功皇后譚の図はあるものの、対応する本文はない。第七図は神功皇后が新羅征伐に向かう場面である。右画面に、神功皇后が船中にあり、左画面には、海上に亀の上に覆面をした磯良が二つの宝珠を持って立っている。ポストン本には二紙分の長大図に、右画面には、船中央に神功皇后、舳先の盾の上もとで磯良（か）が宝珠を一つ掲げ、右画面には、海中を進む龍神の使臣（か）鬼が描かれる。第八図は天武天皇が大伴の皇子に敗れて、吉野に逃れる場面である。画面中央に、翁と媪、左画面の邸の中に天武天皇が描かれる。ポストン本は、吉野の山の中で、左画面の右の奥に鎧をまとった天武天皇が、左奥に翁と媪が、右画面には天武天皇の従者が描かれる。第九図は翁と媪が天武天皇を舟の中にかくまう場面である。左画面奥に、天武天皇を隠した舟と、その手前に翁と媪が、右画面には天皇追う大伴の皇子の軍勢が描かれる。第十図は仏法が日本に伝来する場面である。國學院本には本絵に該当する本文はない。天理本には下巻の冒頭に該当本文がある。國學院本には、天理本にある「朕か命は…きさき」(五六五頁)が欠落している。ポストン本には該当する絵はない。第十一図は四艘の舟が海に遊ぶ場面である。右の画面から、釣りをする船、横笛を吹くなど楽器を演奏する貴人が乗る船、和歌を読む貴人が乗る船、左画面には、舳先に船頭が座り、船尾と船中に僧侶たちが乗った船などが描かれている。

## 注

- (1) 『室町時代物語大成』11 (角川書店、昭和五十八年)。濱中修氏が、天理本『舟のゑとく』を対象として出典及び生成過程について詳細に論究されている『舟のゑとく』の形成『室町物語論攷』三〇〇〜三二五頁 (新典社、一九九六年)。
- (2) 石川透氏「ポストン美術館の絵巻について」(『むろまち』第十集、二〇〇六年三月)。
- (3) 大谷大氏「新出異本『舟の威徳』解題と翻刻」(『緑岡詞林』33、二〇〇九年三月)。当該『舟の威徳』は現在は石川透氏所蔵。

## 舟のゐとく 翻刻

## 上卷

それ天地ひらはしまり男神女神と  
 あらはれあまのうきはしのもとにあまく  
 たりましてみとのまきはいして海山  
 草木を作り国をわかちをき給ひし  
 をうけつき人王の代に至るまでそのと  
 くをほとこしたまはすといふ事なし  
 其後代々のみかどさまぐの器財をつく  
 り出し給ふ中にも仁王三十二代用明  
 天皇の御宇にあたつて救世観音出世  
 まし／＼聖徳太子とあらはれあまねく諸  
 器をひろめ給ふとみえたりしかれば世に  
 すくれて国土の重寶万民のたすけと  
 なるは船舶にすぎたる物あらしあるひ

は巨海をへたてし他の国にもいたり  
 数千万里の旅に出ても一步のつかれ  
 なく又ははしなき大河をもやすくわ  
 たりあるひは仙術をえたる人もほうら  
 いにいたるためしあり又何よりもあり  
 かたかりしは仏のとき給ひし金言のわか  
 朝にわたりし事これ船のいとくならず  
 や抑この船をつくりはしめしその来  
 歴をたつぬるにもろこしの古へ三皇  
 のすゑのみかと軒轅皇帝の御代とか  
 やこの時よりわきて国土おさまり万民  
 ゆたかにすみて君のめくみをたうとみ  
 あふく事はふる雨の草木をうるほすに  
 ことならず爰にまた神農より五代の末  
 葉帝明の孫帝宣の末子に蚩尤と  
 いへる悪行の人ありその身は堅石にし  
 て頭はあかゝねにてひたいは鐵なり朝夕  
 の食物にはいさこをくひ石をのんで身

命をつくこれすなはち山海の精化しせいのか

て今人間となりたるものなれば山

をつんさき水をくゝる事はいさゝか事

ともせざるくせものなりしかるに蚩尤心

に悪きやくをおこし我すてに神農の

末孫たり王氏を出てとをからす天下

に王たるへき身のいかてか人の下風したてに

つくへきやと叛逆ほんぎやくのこゝろさしをはけ

ましつはものをあつめて皇帝をほ

ろほすへきはかりことをそ

めぐらし

ける

(第一回)

皇帝この事をひそかにえいらん有

てかゝるけきしんをゆうめんしてふるま

はせは国民のわつらひたゆへからすかれを

ほろほすへきはかりことを智臣貨狄ちしんくわてき

揚基やうきといへる二人をめしてえいりよの

おもむきをちよくちやうある二人の臣下は

つゝしんでうけたまはりそれ普天ふてんの下王

土にあらすといふ事なし卒土そつとの寶ひんみ

な王臣なりいかて安穩あんえんなるへき軍兵ぐんひやうをさし

つかはし時日をうつさすほろほし給はん

に何のわつらひか候へきもし王命天運うん

にそむき官軍くわんぐんうちまけてかれか政道

天にかなひ君にまさらは一畝ほの地をう

けて下臣とならせ給ひてよろしきに

したかひ給ふへし天道はみてるをかくな

れは悪あくぎやく不道乱臣ふだうらんしんに

いかて應護おうごあらんや

とそ申けり

(第二回)

皇帝えいふんありて義はよろしきに  
 したかふにしかしいそき官軍をもよほ  
 せとそのたまひける二人の臣下御まへ  
 を立て国中の官軍をあつむるにその  
 せいすてに五十万騎としるせり皇帝え  
 いりよ心よく貨狄を上將軍として廿  
 万騎をさしそへ揚基を比將軍として  
 十八万きをそへらるのこるところの十二  
 万よきは内裏にとゝめて禁門をしゆごさ  
 せらる貨狄揚基はせんしをかうふり官  
 ぐんを引くして蚩尤かたちにはせむ  
 かふしゆうこれをきゝて我はかり事い  
 またならさるうちにさへきつて敵にかこ  
 まれてはいかにたけくおもふともえきある  
 まししかしうちしにせんにはとひとり  
 ことしてみつから十万よきをそつして敵  
 のよせさるさきにせめのほれとてみや  
 こへこそうつたちけれほとなく貨狄か勢

涿鹿野につくとき蚩尤も同し所につ  
 く両陣の大將軍はたをすゝめときの  
 こゑを三度あけて貨狄やうきか四十  
 万騎としゆう十万よきと入みたれかけ  
 ちかへほこさきより火えんを出しせめ  
 たゝかふしゆうは小勢なりといへ共諸卒  
 心さしをひとつにしてかくるも引も  
 つらをみたさすそのうえ一人当千のつは  
 ものともあまたあり大將軍しゆうまつ  
 さきかけて下知すれば官軍の大勢し  
 ところになつて馬のあしをたてかね  
 たりしゆうこれに利をえてせめつゝみ  
 をうつてすゝみければ貨狄揚基か四十  
 まんき引色に成てかゝりえす二人の大  
 將これを見て馬をかけすへ大音あけ  
 てそれ運は天にあり義によつて命  
 はかろしちよくちやうをうけて戦場にむ  
 かふものきたなきまけをしていつくに身



をやすくせんひとへに只うち死と心さしまへゝはすゝむともひくなとげぢして諸軍勢をはちしめければ士卒しそつこれに

はけまされて命をぢんがいよりもかる

くし義ぎを千金よりもをもくして一ど

にとつとかゝりてしゆうか十万よき

をとりこめて一人もあまさしとせめた

たかふ大勢にふせいかなはさる事なれば

しゆうかつはものこゝろはたけくいさめ

とも入かはる味方なく大半うたれければ

のこりすくなに成て

すてむちをうつて

落行ける

(第二回)

されとも大将のしゆうは敵にうしろをみせしとたゝ一人ふみとゝまつて四方

にあたり八方にめぐりて七八度まで

あひあたるしかれとも官軍はいさみほ

こつたる心たゆまず一足もひかされは

かなはずその身もつかれければけふの

軍はこれまてと上谷じやうこくに引しりそく

日すてに西の山にかゝりたまへは官

ぐんもつゝいてをふにをよはずしはらく

陣をとつて馬のあしをそやすめけ

るされともしゆううつても出す官軍

もかさねてせめもいらすして皇帝

の内裏にかへりけりかくてしゆうははい

くんのつはものともをあつめて上谷じやうこくの

おくに引こもり岩をたゝむて塀へいとし

山をほつてすみかとしまはりに十里の

ほりをほり谷水をなかにまなくくたる

海をたゝへて時刻をまちてろうきよ

したりこれによつて万民あんとと思ひ

(第四回)

にそのはつをあたへて万民あんとのおもひをなさしめ給へと天にうつたへなけき給ふに貨狄くわてきそうしてはいはくこのなけきはしゆうか両臣に高龍子悪魁子といふものなりそのふるまひをうかゝひきくにあたり人けんのわさにあらずたやすくからめかたし大勢をもつてしつめすんはかなふましとそうしければ皇帝えいふんありてしからはたゝしゆうをほろほさんにはしかしはやうつたつ用意せよとちよくちやうあれは貨狄かさねて申けるはかれをほろほさん事たやすからしそのゆへはすみかのまはりに大きなる海をたゝへたりいかゝしてこれをわたすへきとそうしける皇帝これをきこしめしけに

もかなひかたき事なるへし何とそはかりことのあるへきとて御座をたゝせ給ふてあけくれこれをえいりよにかけて夜のおとゝに入せ給ひてもやすく御しんなる事なしあるとき南殿に出御なつて秋の名こりをおほしめして泉水せんすいの致景ちけいをなかめておはしますに夕風ひやゝかに吹落て柳の一葉ちりかひて水のうへにへうはくせりみかとこれをえいらんありて貨狄くわてきやうきをめして船といふ事をたくみ出し給へは二人の智臣これをかんして水にうかへてみるに水をわたる徳は有といへともおもふ方にやらん事自在ならずとてそれより櫓ろかい梶かぢをつくり出してこゝろみに御溝みぞにうけてわたれはいさゝかもわつらひなしいまは猶豫ゆうよすへきにあらずとて数千そうの

舟をつくりて三十万騎の軍兵をもよ

ほし蚩尤かこもりたる上谷にをし

よせせめつゝみをうつてせめいれは蚩

尤ゆおもひのほかなれにはかにぎやう天

して進退度しんたいどをうしなふ貨狄揚基くわてきやうき

すきまなくきつてかゝれは蚩尤一人官

軍にむかつておもふほと軍してつ

るに身をほろほしけりそれよりつ

たへて船をもつて

代のてうほう

とそ

あふ

き

ける

(第五回)

そのゝち周しうの武王ぶわう西伯せいぱくと申せしとき

悪王なりし殷いんのちう王ほろほさん

ためはかりことをめくらし太公望たいこうぼうを

ひんかくとして軍の法をたつね給ふ

に太公望はかり申けるは紂王ちうわうはす

てに美人びなりし妲己だつきにまよひ悪

行つもれり天あにこれをにくみ給

はさらんや時いまいたれりいかてほんい

をとけたまはてはあるへきしからはいやし

くも大將軍の号をゆるされ諱いみなをを

かして追手にむかひみやこの東門より

せめいるへし君はからめてにまはり給

ひて船ちをへてみやこのうしろよりをし

よせたまはゝ前後の敵をふせきかねて

度をうしなふへしと申ければともかく

も下知にまかすへしとて西伯せいぱくは兵船三

百よそうにて孟津まうしんといへる海ををし

わたしてつるに紂王をほろほし周

の代八百歳をたもち給ふもひとへに

船のいとくによれりさて我朝につく  
りし事は仁王十代のみかと崇神しゆじん

天皇の御宇とかやその由緒ゆいしよいかんと

たつぬれは第三代のみかとるとく天

皇の御代に天よりみつのかゞみふり

くたるそのうちひとつは本朝三種ほんてうしゆの神

器の中内侍ところ也二つは天照太神

のあまのいは戸にこもらせ給ふとき

八百やをよろつの神たちこれをなけき

庭火をたき神楽をそうし給ふとき

岩戸をひらきたまひて御すかたを

かゝみにうつさせたまひいまよりのち子

孫なく我をみるごとくおもへとていさせ

給ふかゝみなりはしめいたまへるは

ちいさくてまたいかへ給ふそのかゝみは

紀伊国日前ひさきの宮とあらはれ給ふ後の御

かゝみは伊勢の国蓋見ふたみの浦に一里は

かり沖に岩にそふておはしますし

ほのみつるときは岩のうへにあかりしほ

のひるときはさかり給ふされは崇神天

皇の御時かの鏡同殿しかるへからす

別殿をつくりまたかゝみをもあたらし

くいかへたてまつりたくえいりよに

かけておほしめされけるかいかにもして

ふたみの浦にましますかゝみをおかみ

てこれをにせてんとおほしめして

近衛このゑの大臣真人おとま大連まひとのおほむらしにみことのり

ありければ真人まひとのおとゝ勅命をうけた

まはりてかのかゝみをおかまんとした

まへとも海上なればわたる事かなはずし

てむなしく過し給ふかいかにとしてか

この海上をわたる方便ほうべんのあるへきとあ

けくれ肺肝はいかんをくるしめて天神地祇

にきせいしたまふかある夜の夢に

ひんつらゆふたる天童てんどう一人まくらもと

に立給ひて大唐国もろこしの先蹤せんせうをしめし

てふねをつくるへきそのやうををし  
へて童子ははるか天にのほりさ  
りぬ夢さめてつとにをきこれまこ  
とに日の神の示現しげんなるへしとあり

(第六回)

かたくて番匠ばんじやうをめしてつけのことく  
船をつくらせ御らんすれはいかなるあら  
き灘なだにうけたりともわつらひ有へ  
きともおほえぬくつきやうの舟なり  
をとゝなゝめならずよろこひおほし  
めしてすなはち海にをしうかへて蓋ふた  
見の浦にこきわたりてかのかゝみをお  
かみ給へは塩しほのひかたにつけてその  
かたちあらはれたまふにしんくをこらし  
て拜ほいしとゝめてみやこにかへりいうつし  
給ふかすこしもたかはすそのうへふる

きもあたらしきもれいけんはをとり  
たまはすそれよりして世につたへて  
ふねといふ事を

しりたり

下卷

又十五代の女帝神功皇后ていじんぐうくほうこうは仲哀天皇ちゆうあい  
の御かたき新羅国しんらをせめ給はんためつ  
くしちくぜんはかたの博多にいたり給ふ住吉  
大明神はこれ海神なれば御舟しゆごの  
ため御みにもにしたかひ給ふを大將軍  
を給はり舳へさきにすゝみ給ふかそうもん  
あるは龍神りゆうしんのもつなるみちひの玉をから  
せたまへかしと皇后それはいかゝせんと  
ちよくちやうある明神かしこまり我はか  
りことをめぐらすへしとて海上かいしやうに船を

あまたうかへてそのうへに舞臺をかまへ  
 十二人の児をじんじやうに出たゝせをん  
 かくをしらへてまひあそふそのたえなる  
 こゑ上は悲相天までもひゝき下はこん  
 りんさいまでも聞ゆへきとそ身にしみ  
 けるさるほとに海底にすむ磯良と  
 いふもの此こゑにひかれておほえす海  
 上にうかひてこれを見る住吉大明神  
 いそらをめして我君異国たいちに行  
 幸なるに何とていまゝてはまいらさるそ  
 とのたまへは磯良かしこまり我ひさしく  
 海中にすんですかた見くるしきをは  
 ちてとそうもんす皇后せんしあるは龍  
 神のもつなるしほひるしほみつのふた  
 つの玉をとりてえさせよとのたまへは  
 いそらうけたまはりやすき勅定なりと  
 とて御前をたつて海に入ぬしはらく  
 ありてふたつの玉をさゝけて来るみかと

この玉をかりえさせ給ひ新羅にわたり  
 てつゝかなく賊徒をほろほしかへりた  
 まふこれもふねの

巨海をわたる

とく也

(第七図)

仁王四十代のみかと清見原の天皇は御  
 おぢの大友のわうじと位をあらそひ  
 ましゝてすてに軍にをよひしか  
 おほとも  
 大友の皇子の軍兵は大勢にてしかも  
 まうしやう  
 猛将なれば天皇うちまけ給ひ多勢  
 にかこまれ給ふをいまた天のめくみや  
 つきさりけんふしきにかこみを出給ひ  
 よし野のおくへにけこもらせ給ふを皇子  
 の軍兵しきりにあとをもとめてをそ  
 ひきたる天皇いかゝせんとてえいりよ

をなやまし給ふ御ともにさふらはれける左  
 右の大臣こゝかしこを見めぐり給へはあや  
 しけなるしつかふせやあり入て見給ふ  
 にあるしはなしこれこそくつきやうの  
 ところなれとてみかとを入まいらせてし  
 はらくやすみ給ふにあるしのふうふつり  
 のいとなみをしてかへりけるかおほぢは  
 我屋のうへをうちなかめていかにうはあ  
 れ見たまへ我館たちの屋のうへに紫雲しうんのたな  
 ひきたるそやつたへきゝしは天子の御座  
 ところのうへにこそかゝる事はある  
 なれといへはうはもうちなかめていと  
 ふしきなる事かなとていそき家に  
 かへり入て見れば左右の大臣たち出た  
 まひいかになんちらはこの屋のあるしにて  
 あるかとのたまへは夫婦はかしこまり  
 かうへを地につけされはこそおもひし  
 ことよとてなみたにくれてとかくのこと

はもいたさす左大臣のたまひけるはなん  
 ちら心なき山かつなりとも物のあはれ  
 をしれこれは日本の御あるしにてわ  
 たらせ給ふそさるしさいあつてこれへ  
 しのはせ給ひてましますもし御うん  
 ひらけはなんちを世にあらせん

そと

おほせ

けれ

は

(第八回)

おほぢうちゑみて御こゝろやすくおほし  
 めされさふらへたとひ二人かかうへははねら  
 るゝともいかてひんなき御事の有へ  
 きいさゝせ給へとてうはもろともに出て  
 小船一そう引出てうつふしになし

かとを其中にやとしまいらせておほち  
 とうはと二人はこしうちかけてさらぬて  
 いにて四方のけしきをなかめて物かた  
 りしてゐたるところへをひての軍  
 兵七八人はしり来りて大いきをつき  
 いかになんちらかやうくのあやしき人や  
 とをりつるとたつぬれはおほちうち  
 うなつきさる事ありその人はふた時はか  
 りさきにこのおくなる山にて見待ると  
 いふ軍勢ともきゝてそれかたへか行給ふ  
 へきととふおほちからくとうちわらひを  
 ろかなりかたこの山と申はもろこし  
 へもつゝきたれはいつことさしてしり  
 かたしなをわけいりて尋ね給へとたは  
 かれはけにもとおもひなを御あとをたつ  
 ねてそわけ入けるふうふのものは心よけ  
 にいまはしさいあるましといふところへ  
 又をひてと覚えて二十きはかりはせき

たりてかゝる事やあるととふうは申け  
 るはさきにもかゝる人きましたりとて  
 ありしことくたはかれは一人こさかしけ  
 なるおとこ出いふ海河にうけて波上はしやうを  
 わたるとくこそあれくかにありて何  
 のえきなしそのうへうつふけたるも  
 なをふしんなり人々よりてこの舟をお  
 こして見よと下知すればすれはをのく  
 けにもとおもひて

たちかゝり

舟おこさんと

ひし

めき

ける

(第九回)

おほぢこれをきゝてあはやいまこそあ



らはるゝところよときもをけしいかゝ  
 せんとおもひしかさらぬていにていふやう  
 いかにかた／＼聞給へそれ漁夫ぎしよふといふは  
 さたまりたるすみかなし船をもて家と  
 せりされはもろ／＼の家具を舟におさめ  
 て盗賊たうぞくのなんをふせくれうしの身にて  
 は船さかされたるも家をさかされたるも  
 同事也我いまさしたる罪科ざいこわなし家を  
 さかさるへきことはりなし身こそふせ  
 うにさふらふともまこもありひこもあ  
 りかゝるらうせきのもの有出あひて  
 うちとめよやと手をうつてよはゝれは  
 山々谷々にゐたりけるあふれものと  
 もこゝかしこより四五十人はせあつま  
 り弓や太刀かたなをもつてをひての  
 ぐん兵にうつてかゝれはかなはしとやお  
 もひけんみなちり／＼ににけ行ける其  
 のちみかとはふねのうちより出たまひ

## (第十回)

にそなへむとをふしたてらるゝまことに  
 そのすかたかたちゆふにやさしく心  
 さまにいたるまでたくひなきびしんた  
 りみる人おもひをかけ百年のよはひを  
 一夜のちきりにかへむと思ふ人幾千万  
 といふ事しらすかくて過し給ふ程にもろ  
 こしのみかと高宗皇帝えいふんあつ  
 てすせんはんりのかいしやうをへて  
 ちよくしをもつてこひとりたまひ  
 異国いこく本朝あさからぬえんをむすひて  
 水魚のおもひをなしかゝる目出度た  
 めしをまつ代にのこさんとて三国無双こくぶさう  
 のたから物を我朝にわたし給ふをかま  
 たりよろこひおはしましかくたくひな  
 き重寶ていぼうをいたつらにせんもほいなし  
 とてみやこにこうぶくじといふがらん

をこんりうありてかのたからをきしん  
 せられけるされはもろこし日のもとのかよ  
 ひをこゝろよくさせらるゝ事もふねなく  
 てはそのかひあるましかくのことくのとく  
 をえたる事天ぢくしんだん我朝に  
 あけてかそへかたししかれは一天の  
 君もれうどうげきしゆとなづけて  
 舟にめされ御庭の泉にうかへさせ  
 花のあした月のゆふへの御遊あるひ  
 かるげんじの二条院にましくて胡こ  
 てふのまひをはやされたるがくのふねは  
 こゝろもこと葉もをよはれはこそ公卿  
 も殿上人も四町よまちにすませ給へるき  
 さきたちもこれをめてゝ春の日の  
 なかきをもはやくれけるよとおし  
 みあひ給へりまた東夷とうゐ南蠻なんばん西戒せいけい  
ほくてき北狄のちよくめいにそむきてぎやくしん  
 をおこすときはけんひいしをさしつか

はして乱げきをしつめてばんみん  
 をあんをんならしめらるゝは軍船異国いくさふねいこく  
 つくしにおもひたつ旅の物うき心をは  
 さほの歌にてなくさむるはふな君  
 うみのそこなるうろくつをも心のまゝ  
 に釣つりの舟やみにはとくをうかひ舟稻いな  
 葉をあらすとりをひ舟花ふみちらす  
 うくひすをよせしとをとす鈴付ふね  
 世わたるわさをしはをふねその外友船  
 うき舟あしわけふねこひちによそ  
 へてかよひふねなと哥にも詩にも詠  
 せし数しらす幾世ひさしき我国を  
 ひらきはしめ給はんため天津神の  
 駕かし給ひ  
 あまくたり  
 たまひし  
 あまの  
 いはくす

ふね

ほとけの

しゆ

しやう

あはれ

みて

いふ事なし

まことに

めてたき

ゑとく

なり

## (第十一回)

あんをんけらくの天上にみちひき

たまふくせいのふねにのりのうみ

ふかきじひこそありかたけれ雲の

うへには月の舟あまの海原やわたる

らんのらねとえゝるさけの舟座敷

にあかるははなをいけたるつり舟みづ

ふね馬舟魚の舟にいたるまでみな

くそのとくを

なさすと